

本州のダイビングのメッカといえは、
東の横綱、伊豆半島に対し、
西の横綱が、紀伊半島の最南端串本だろう。
海中の四季を色濃く感じることが出来る伊豆、
黒潮がぶち当たり、温帯と亜熱帯、
両方の海を一度に感じることが出来る串本。
……そんな風に差別化できるのかもしれない。
日本一多くの魚種が生息しているという
個性豊かな海は、
串本初体験の私に、
新たな感動をもたらしてくれた。

水中写真家・越智隆治が
初めて潜った
本州最南端

マクロでも、ワイドでも、
被写体に困らない贅沢な海

串本

撮影&文=越智隆治
取材協力=串本ダイビング事業組合
Design = PanariDesign

小魚を狙ってガレたサン
ゴの下でチャンスをつか
がうアザハタ。目がマジ
過ぎて笑える

朝焼けに染まる橋杭岩。
その異形が、これから潜
る串本の海への期待感
を昂揚させる

幕開け!

東京駅から584km、
初めて潜る串本の

東京から東名高速、東名阪自動車道、
紀勢自動車道を乗り継いで、紀伊半島東
岸を走る国道42号線をひた走ると、本州
最南端の町、串本に到着する。Google
mapでルート探索したら、東京駅からの所
要時間は、7時間57分と表示された（検索し
たときの混雑具合で、所要時間は多少違ってくる）。
総距離にして584km。

この総距離をものともせず、東のダイ
ビングのメッカ・伊豆半島を超えて週末に
串本に通うダイバーたちがいる。ちなみに
東京駅から伊豆海洋公園までの総距離は、

142km、所要時間は約2時間40分。お
膝元の大阪駅から串本は214km。今では、
高速も伸びて、3時間前後で到着する。

車で紀伊半島東岸、国道42号線を南下
し、串本町に入りしばらくすると、海に突き
出した奇岩群の異様な風景が目の前に飛
び込んできた。橋杭岩は、紀伊大島まで
続く火成岩でできた不思議な岩脈。この
奇岩群を越え、潮岬を挟んで西側にある海
が、今回取材で潜った串本エリアの海だ。

串本の海が、本州最南端に位置して黒
潮が当たる特殊な海であることはなんとなく

知っていたけど、実際に潜ってみたことのな
い自分には、その海の魅力にいまいちピン
ときていなかった。

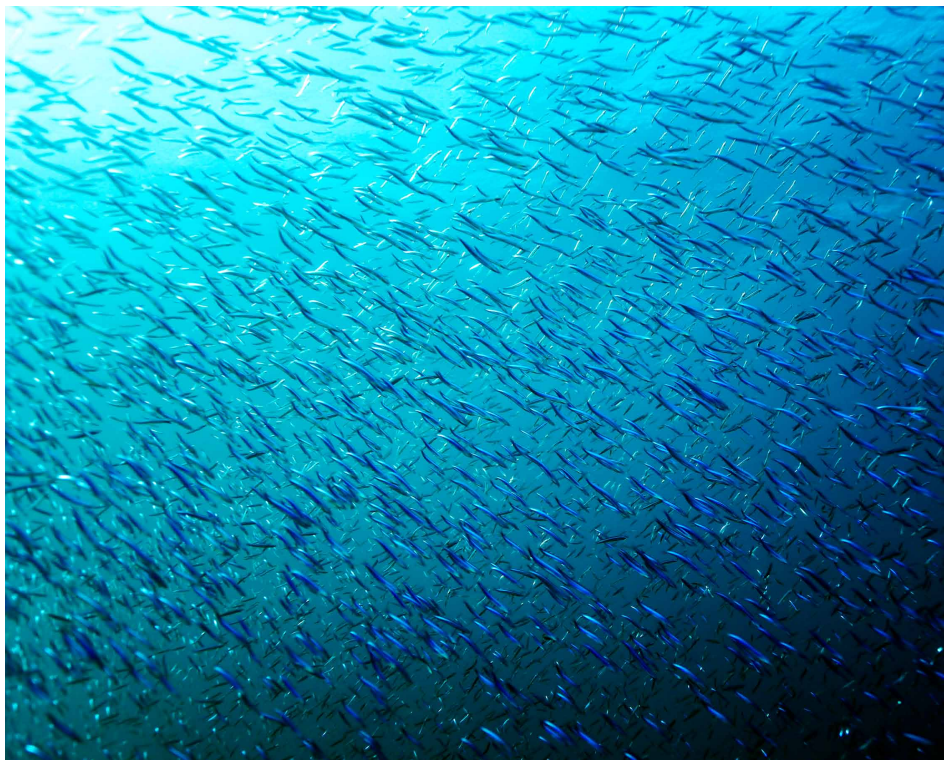
串本に潜る前、水中カメラマンとして一
番参考になったのは、ネットに挙がってい
る歴代の串本海中フォトコン受賞作品の
数々。アザハタの根、妙に人懐っこいイ
ラ、多種多彩なマクロ生物たち、外洋の群
れ、浅瀬に群生する美しいサンゴ、バブル
リングなどなど。印象に残る作品も多くあ
った。そんな作品を参考にしながら、串本の
海を潜ることになった。

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端 **串本** マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海

多少流れがあった方が、魚圧のある群れを堪能できる

3D マッピングのように、変幻自在に表情を変える、キビナゴの群れ

キビナゴの群れに、執拗にアタックをしかけるスマガツオの編隊



外洋へ。

視野を覆う魚群！
ワイド狙いの

まずはワイドの串本を撮影するという
ことで、外洋のポイントを攻めることに。最
初に向かったのは「双島沖2の根」。エン
トリーすると、少し速い潮流に逆らいなが
ら、ドロップオフへと向かう。

すると、海中を覆い尽くさんばかりのキ
ビナゴの群れに囲まれた。その群れが、キ
ラキラと太陽光を浴びながら変幻自在に

姿を変えていく様は、海中に投影された
3D マッピングを見ているようでもある。

そこにアタックをかけていたのはスマガ
ツオ。猛スピードで突っ込んできたと思っ
たら、あっという間に反転して姿をくらす
スピードスター。本来は、カンパチの群れ
を狙いたかったが、残念ながら今回の滞
在では遭遇できず。

しかし「島廻り」では、同じくキビナゴを
捕食しにきたツムブリの群れにしばし巻か
れることになった。

圧巻だったのは、エントリーしてすぐ目
の前に出現した海中の黒雲のように魚圧
の濃い、メジナ玉。この魚圧を目の前で
撮影できるだけでも、興奮もののダイビン
グだった。



外洋は岩がちの地形ポイントが多く、以前には海底遺跡か
と思われた場所も。「浅地」

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端 **串本** マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海

ocean α

©ocean+ α ウェブマガジンの二次配
付および画像・文章の複製、二次使
用を禁じます

目の前に
飛び込んできたのは、
壁のようなメジナの魚群。
なんなんだ！
この魚庄は！！

外洋へ。

もう一つ、外洋で「すげ〜!」と興奮しながら撮影したのが「下浅地」。トップが水深18mの根の潮当たりの良いドロップオフで乱舞するキンギョハナダイたち。1ダイブ中ここのハナダイを撮影していてもいかなと思えるくらいの圧倒的な群れ。下浅地だけでなく、外洋のポイントの多くでは、ハナダイたちが乱舞する姿を堪能できる。潮の状況次第では、美しい編隊を組んで泳いでいることもある。そんなタイミングで潜れたら、最高の被写体になるに違い無い。



01



02



03



04

乱舞する
キンギョハナダイ
圧倒的な魚群!

外洋へ。

01、「島廻り」の根の上に群れるシラコダイは、学名にニッポンが入る唯一のチョウチョウウオ。ちなみに学名はChaetodon nippon

02、「下浅地」のドロップオフを埋め尽くさんばかりのキンギョハナダイの群れ! 凄すぎる!

03、「二の根」の離れ根、水深30mに群れるテングダイ

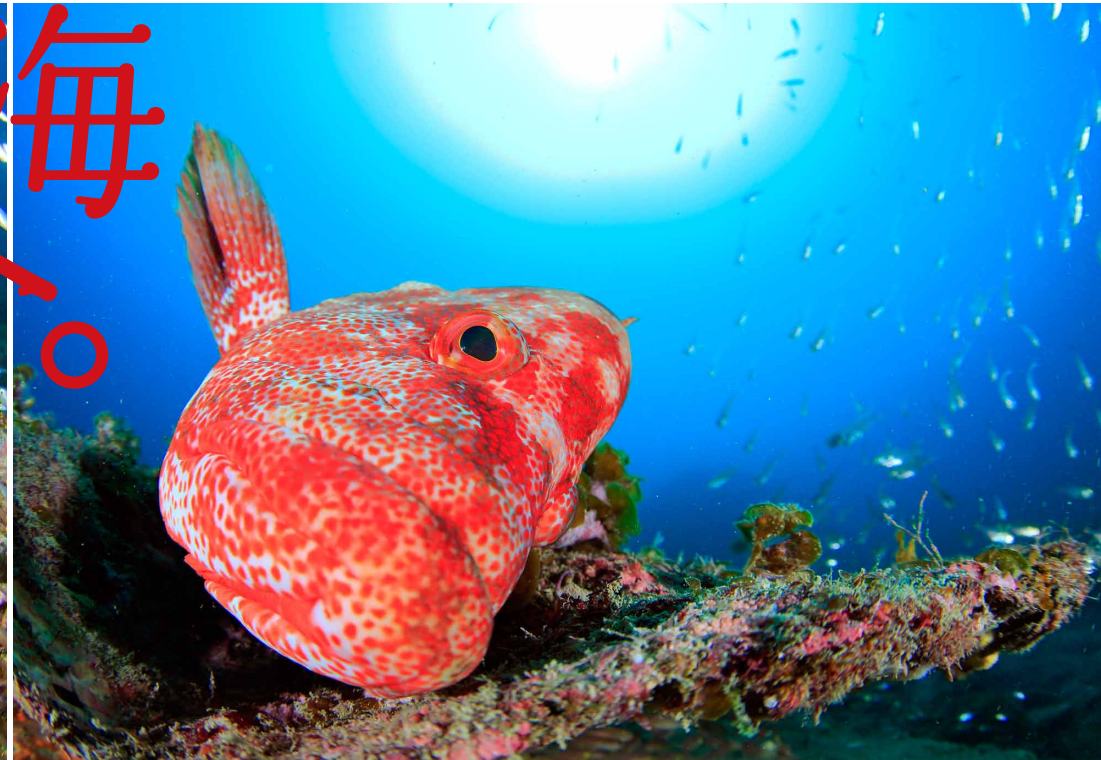
04、「島廻り」では、キピナゴを狙う、ツムブリの群れに遭遇した

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端 **串本** マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海

内海へ。

「アンドの鼻」のオスのアザハタは、2つの縄張りを回ったり来たりと忙しなかった

小魚の群れ具合が少ないのが残念だったけど「備前」のオスのアザハタは、近寄れるし、とにかく個性豊か



串本といえば、クロホシイシモチやキンメドキの群生の中にあるアザハタ。フォトコンでも、多くの作品が入賞している、串本を代表する海中景観の一つだ。というわけで、今回も当然のように狙いに向かった。向かったのは、毎年1～2ヶ月ほど期間限定でオープンする「アンドの鼻」。そして、いつでも潜ることのできる「備前」

にあるアザハタの根。

入賞作をイメージしながら、そんな写真が撮れるのかと少々不安になりながらその場に向かう。「アンドの鼻」では、二つの縄張りのパトロールで行ったり来たりとせわしないオスに翻弄されたが「備前」では、ダイバーをまったく気にしない慣れたオスのおかげでかなりの接近撮影が可能だった。

串本の海の顔、アザハタたちに会いに行く

残念だったのは、今年はその場に群れるクロホシイシモチやキンメドキの数が少なかったことだ。年によって、群れ具合も違うそうなので、来年は海中に溢れんばかりに群れてくれることを期待したい。

アザハタの根、今年はいマイチの群れ具合のようだったけど、それを払拭するくらいの群れが、「中黒礁」という水深10mほ

どのポイントに存在した。この群れ具合、まさに海中雲海。いくつもの根をクロホシイシモチとキンメドキの雲海が埋め尽くしていた。ところどころにハナミノカサゴが浮遊していて、雲海の中を悠然と泳いでいた。

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端

串本

マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海

内海へ。

タタリ神が、
眼前に姿を見せた



……それだけでも夢中になって撮影していたのに、ここに突如姿を現したのは、「もののけ姫」に出てきたタタリ神のようなゴンズイ玉。うねうねとどぐろを巻きながら接近してくると、もう「うわ、マジ祟られそう!」と腰が引けながらも、こんな状況なかなか遭遇できないと、構図を決めてシャッターを切り続けた。

フォトコン入賞作品の中にもまったくなかった、このシーン。機会があったら絶対潜って撮影にチャレンジすべき! 水深も浅く穏やかなポイントだし、これだけ広範囲に群れていれば、何人かで撮影していても被写体には困らなそうだ。

ocean+α

©ocean+α ウェブマガジンの二次配
付および画像・文章の複製、二次使
用を禁じます

01, 優しく手を突っ込めば、刺られる(刺される)ことはないというけど、決して真似しないように! 「中黒礁」

02, ビーチエントリーでサンゴの森へ。「オレンジハウス前ビーチ」



01



02

溢れる
ワイドの被写体
内海へ。



03

03, クロホシシモチとキンメドキの雲海の中を悠然と泳ぐハナミノカサゴたち。「中黒礁」

04, 温帯の魚、カゴカキダイと熱帯の魚、アカヒメジの群れが見られるのも串本ならではの。「ガラスワールド」



04

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端 **串本** マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海

内海へ。

愛嬌たっぷりのイラ！
それも1号、2号……3号までいるの!?

ワイドで撮影できる内海の生物で、私がもう一つ、すごく気になったのは、イラ。伊豆などでもよく見かけるけど、正直こんなに寄ってくるのを見たことがない。ガイドが海中にある貝をあげるようになってから、これほど人懐っこく寄ってくるようになったそうだが、これだけ接近できるとなると、やはり撮影したくなる。

フォトコンでもこのイラを撮影した入選作品が多く目に付いた。「備前」やその隣の「住崎」のイラには、1号、2号、3号と人懐っこい順に番号をつけて呼んでいるガイドもいるようだ。

温帯の魚、カゴカキダイと亜熱帯の魚、アカヒメジ。この両方の群れが撮影できるのは「グラスワールド」。このコラボも、串本ならではの海中景観。

両者を寄せて上手に一緒に撮影するのはなかなか難しらしく、フォトコンには見当たらなかった。この2種類の群れを上手に撮影できたら、審査員の目に止まるかもしれないな……。こんな風に、自分の頭の中では、フォトコン入賞を意識する思考回路で串本の海の撮影が進んでいった。

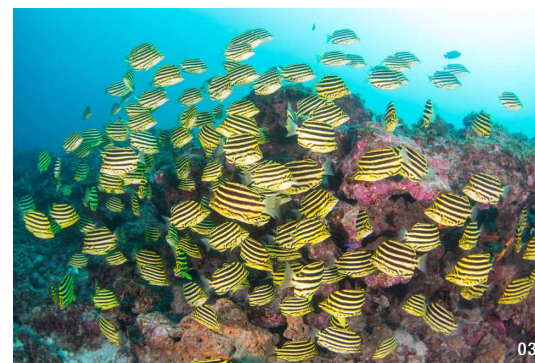
忘れてならないのは、浅瀬に群生するサンゴ。本州で最も黒潮の影響を受ける



01



02



03



04

01,ガイドが来るとどこからともなく姿を見せる「備前」のイラ1号

02,人馴れしたイラの正面顔は、マペットみたいで、ユニークだ

03,「グラスワールド」のカゴカキダイの群れも串本の人気者

04,サンゴの上に、太陽の光が降り注ぐ

串本には“サンゴ礁”は無いものの、ハードコーラルの量が多く、熱帯のサンゴ礁域と同じような生態系が形成されている“世界最北”の海。このため、国際的な環境保全条約であるラムサール条約湿地としての指定も受けているほど重要な海でもあるのだ。「オレンジハウス前ビーチ」からエントリーして、その世界最北のサンゴをのぞいてきた。昼間の太陽光が浅い海中に差し込み、海底のサンゴ群落に降り注ぐシーンは、まさに竜宮城の絶景。バランスよく、ミドリイシ系のエダサンゴとテーブルサンゴがミックスされた海中景観が、これまた写欲を十二分に掻立てるのだ。

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端

串本

マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海



ネジリンボウと共生ハゼ



ホタテツノハゼ



クダゴンベ



ホホスジタルミyg



ホホスジタルミyg



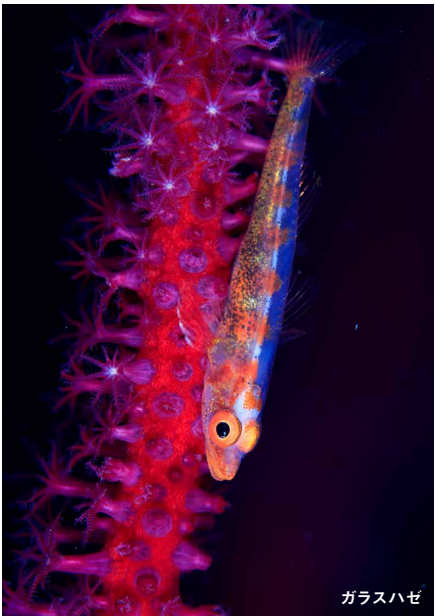
ベンケイハゼ



マルズズメダイyg



モンハナシャコ



ガラスハゼ



アサヒハナゴイ



セナキルリスズメダイ



ハナゴンベyg



スジハナダイ

マクロ狂のうた。

バラエティー豊富な
ラインナップ！
串本のマクロスターたち

外洋にしても、内海にしても、とにかくワイドの被写体に困ることがなかった串本。このままではマクロ撮影を忘れてしまいそうだったので、後半はマクロメインの撮影を行った。魚種は未発表種も含めて1300種以上になるという。日本全体には約4000種の魚類が生息していて、串本で確認されているのは、その3分の1になり、魚種の豊富さでは串本が日本一なのだそう。

だからなのか、マクロの被写体にも困らない。普段から撮りたいと思えるような熱帯系のカラフルな魚も普通にうろちょろしていて、ワイド撮影しながら、早くあの子を撮影したいな〜と横目でちらちらと眺めていたりした。

ページの関係で、撮影したものの全部は無理だけど、今回撮影した魚たちをここでは、一気に写真で紹介していく。浅い内湾

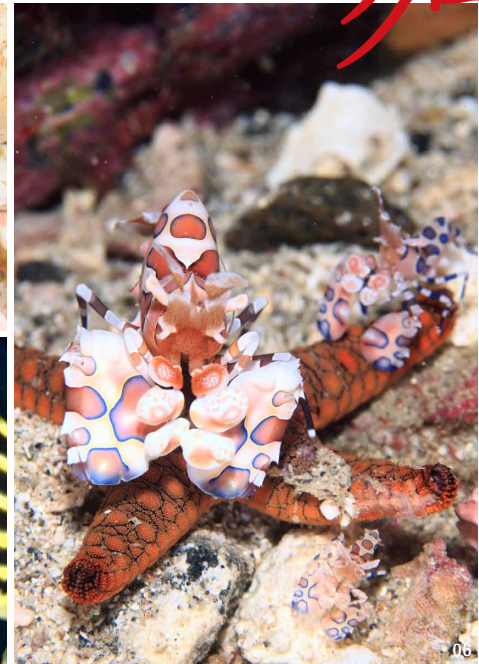
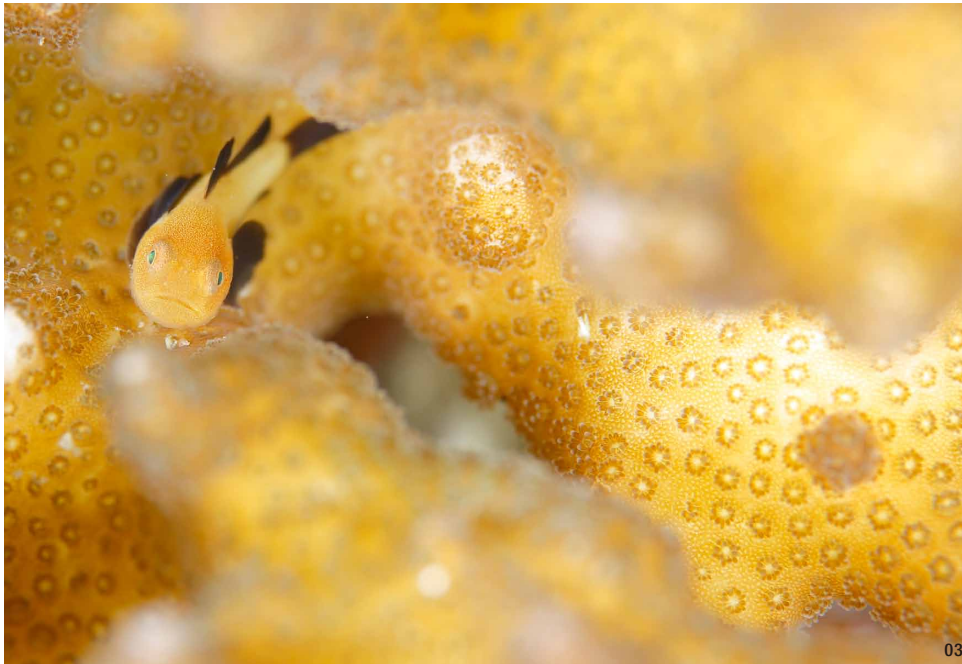
から、深場、砂泥地と、生息環境も様々。そんな中で生物を熟知したガイドたちに案内されて撮影するマクロ生物たち。初めて潜った串本でもあったので、少しでも多くの種を撮影しようと、慌ただしく撮影していったものがほとんどだけど、次回はもう少し腰を据えて、一つの被写体にじっくり時間をかけて撮影してみたい。串本という海は、それができる海であることは間違いない。

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端 **串本** マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海



何度見ても飽きることはない、個性豊かな串本の生物たち

マクロ狂のうた。



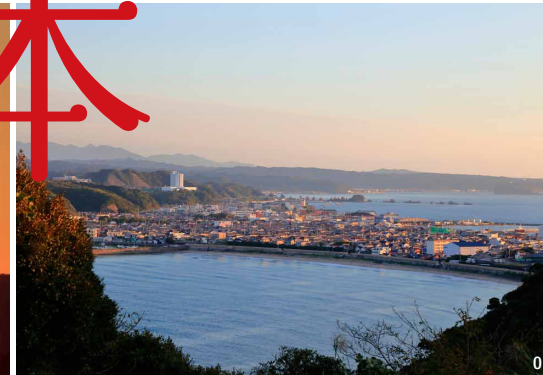
- 01, 初串本で一番気になった魚はレンテンヤッコ
- 02, ムチカラマツエビ
- 03, 撮影しやすかったバンドダルマハゼ
- 04, ユニークな顔をしたカエルアマダイ
- 05, カゴカキダイの正面顔って意外と笑える
- 06, 3匹そろった、フリソデエビ

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端 **串本** マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海

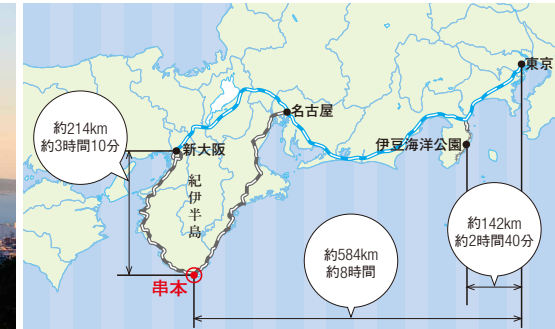
串本

東京駅から
586km。

を目指せ。



01, 手前が今回潜った串本エリアの海、奥が古座の海。まるで表情が違うという
02, 雨雲が去ると、海に迫る山並みに虹がかかった



取材で初めて潜ってみて、良い写真が撮れなかったらどうしようと心配することも多い。特に今回は海中フォトコンを参考にしながら撮影をスタートしたわけで、そのレベルの高さに、初ダイブとはいえ「あまり迂闊な写真は撮影できないな」というプレッシャーも感じていたのは事実。しかし、いざ潜ってみるとワイドにしてもマクロにしても、

なんでこんなに撮影しやすい環境がそろっているんだろうと、潜る度に感動していた。雑誌取材と違い、今回は現地で毎日アップするヘッドライン特集（紀伊半島・串本ダイビング特集「<https://oceana.ne.jp/series/2016autumn>」）と、取材後に作成するウエブマガジンの2本立ての取材。現地で毎日そう簡単に使える写真が撮影できるの

かという不安も当初はあったけど、串本の海に関していうと、そんな事は杞憂だった。「撮影」をテーマとして潜る場合に、こんなにリラックスして楽しめる海はそうそう無いのではと感じたわけで、フォトコンのレベルが高いことにも納得させられた。さて、総距離584km。所要時間約8時間かけて週末に潜りに来たいかって言われると

「行きたい!」でも、それでは自分にはきっと少なすぎるんだよね。もっと、もっと長く潜ってられるなら、8時間かけても、また絶対に車で潜りに行きたい海であることは間違

い無い。きっとそう思うダイバーも多いんだろうな。そして、気に入った写真が撮影できたら、狙うは串本海中フォトコングランプリ! あっ、プロは応募資格ないのか(笑)。

🔍 串本海中フォトコンテストについて詳しくは公式ウェブサイトをご覧ください。
🌐 <http://www.kushi-photocon.jp>

水中写真家・越智隆治が初めて潜った本州最南端 **串本** マクロでも、ワイドでも、被写体に困らない贅沢な海